

○篠原陽子・野崎克弘・黒木利美<sup>1)</sup>  
(宮崎総農試・<sup>1)</sup>退職)

### 【目的】

宮崎県の中山間地域では、夏季の冷涼気候を利用した新品目として、無加温雨よけ栽培で夏秋カラーピーマンが栽培されているが、11月の早霜や春先の積雪により栽培期間が短くなるという問題点がある。

そこで、本試験では、収穫期間を可能な限り確保するため、定植苗齢と定植初期の夜間のトンネル被覆が生育及び収量に及ぼす影響を検討した。

### 【材料および方法】

試験1及び試験2とも、宮崎県西臼郡五ヶ瀬町鞍岡(標高約640m)の無加温雨よけハウスの現地試験まで行った。

#### 試験1 定植苗齢

供試品種は‘スーザン’を用いた。播種は、15cmポット区は2012年2月29日、12cmポット区(対照区)は3月14日、10.5cmポット区は3月28日に行った。定植は15cmポット区と12cmポット区は4月25日、10.5cmポット区は5月2日に行った。畦幅180cm、株間50cm、a当たり111株植えとし、主枝4本仕立てとした。収穫は11月12日まで行った。

#### 試験2 定植初期の夜間のトンネル被覆

供試品種は‘スーザン’を用いた。播種は2012年3月14日、定植を4月25日に行った。トンネル区は定植後から5月末日まで、パオパオ90で夕刻から朝までトンネル被覆を行った。畦幅180cm、株間50cm、a当たり111株植えとし、主枝4本仕立てとした。収穫は11月12日まで行った。

### 【結果および考察】

#### 試験1

定植苗齢が大きいほど収穫が早まり、総収量が多くなった。15cmポット区は対照区に比べ約3週間収穫が早く始まった(データ略)。また、15cmポット区は対照区に比べ、A品収量、可販果収量、総収量が多くなった。10.5cmポット区はA品収量では対照区を上回ったものの、可販果収量及び総収量は対照区を下回った(第1表)。

8月以降の月別収量には各区で大きな差が見られなかったことから、15cmポット区の収量増加の要因は収穫開始が早かったためと思われた(データ略)。

#### 試験2

定植後の生育初期については、主幹部及び主枝部に差はなかった。トンネル区の方が、収穫が1週間以上早く始まった(データ略)。総収量は対照区とほぼ同等であったが、トンネル区の方がA品収量、可販果収量が増加した(第2表)。

以上のことから、中山間地域で無加温雨よけハウスでカラーピーマンを栽培した場合、大きい苗を定植すると収穫が早く始まり総収量が増加する。また、定植初期に夜間のトンネル被覆を行うと、被覆しない場合と比べ総収量は同じであるが、A品収量や可販果収量が増加する。

第1表 収量

区名	A品				可販果				総収量		
	果数 (個/a)	重量 (kg/a)	対慣行 (重量%)	A品率	果数 (個/a)	重量 (kg/a)	対慣行 (重量%)	可販果率	果数 (個/a)	重量 (kg/a)	対慣行 (重量%)
15cmポット	1,556	268.3	109	48.1	2,344	395.8	121	70.9	3,539	558.3	109
12cmポット(対照区)	1,333	246.8	100	48.2	1,839	327.5	100	64.0	3,511	511.6	100
10.5cmポット	1,483	254.6	103	58.5	1,861	310.9	95	71.5	4,367	435.1	85

第2表 収量

区名	A品				可販果				総収量		
	果数 (個/a)	重量 (kg/a)	対慣行 (重量%)	A品率	果数 (個/a)	重量 (kg/a)	対慣行 (重量%)	可販果率	果数 (個/a)	重量 (kg/a)	率
対照区	1,333	246.8	100	48.2	1,839	327.5	100	64.0	3,511	511.6	100
トンネル	1,367	254.1	103	50.1	1,906	341.6	104	67.4	3,278	506.8	99